
affair

小室 仁

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

a f f a i r

【Nコード】

N 3 8 7 9 S

【作者名】

小室 仁

【あらすじ】

大好きなアーティストの歌の自分勝手なイメージ短編、第四話。

雨がしとしと降る、春浅い平日の夜、
久しぶりに、彼女は僕の店に現れた。

週末と違い、店は静かだった。

暇なのを見越して、マスターは今日は店に現れていない。
そして、その静けさを好む常連も少なからずいた。

カウンター越しに座る、歩いて帰れる所に住んでいるという、
自称イラストレーターだという若い女性も、
そんな一人だ。

店の背景に、薄く流れるジャズに耳を傾けながら、
僕の作ったカクテルを飲み、他愛も無い話をするのが好きだった。

そんな常連客の相手をしながら、
ドアベルの軽やかな音がして、

彼女が店に入って来たのを、僕は顔を上げて認めた。
彼女は春の雨にびつしりと濡れながら、

「みーるく！」

僕を見て、明るい声を上げた。

僕は小さくため息をつく。

彼女は、きつとまた振られたのだ。

昔から、そういう時だけ、彼女は僕の所を訪れる。

僕の顔を見た後、今晚の唯一の常連客のイラストレーターを、ちらりと見ながら、彼女はスツールに腰をかける。

「ご無沙汰」

語尾に音符マークがつきそうな弾んだ声。

明るく振舞うのは、無理をしている彼女の癖だ。

「どうも」

僕はわざとぶっきらぼうに答えた。

「マティーニ、ステアね」

彼女は言う。

強い酒を欲しがっているのが、傷ついている証拠。

「はい」

僕は彼女から目をそらすと、指示通りのカクテルを作り始めた。

相当杯を重ねて、案の定、彼女はいつもの話を始める。

今日のターゲットは、カウンターの隣に座る常連のイラストレーター。

「私はこいつを、みるくって呼んでるの」

僕は肩をすくめて、見慣れた成り行きを見守った。

「小学校の時、物凄いちびでさ。毎日二リットル牛乳飲んだの」
そして、彼女はケタケタと笑う。

「集団登校で、最年長の6年だった私は、

毎朝、家に迎えに行ったっけ。

黄色い帽子を被ったひよこ1年生が、こいつだったの」

そう、彼女と僕は故郷が一緒だ。

実家も近く、小学校からの腐れ縁。

こうして都会に上京したというのに、

先に上京をしてOLをしていた、

5歳年上の幼馴染との腐れ縁は、続いていた。

「ねえ、みるく」

語尾を伸ばして、甘えた口調になる。

平日のバーは、閉店が近い時間。

僕は彼女の声に聞こえない振りをした。

「ご馳走様」

イラストレーターの常連の女性客が、とうとう立ち上がる。

今夜は僕と二人きりになれないと、悟ったのだろう。

何回もこのイラストレーターの彼女からは、アプローチを受けていたけど、

例え今晚、彼女が現れなくても、

そのアプローチには答えるつもりは無かったから、

僕は気にしなかった。

「いつも、有難うございます」

会計が済むと、常連客は頷いて帰っていった。

彼女と二人きりになる店の中。

僕は看板の明かりを消しに、地下の店から路上へと続く階段を上がった。

明かりを消して店に戻ると、店の入り口、満面の笑顔で彼女は僕を待っていた。

「何」

僕がぶっきらぼうに言うと、

「プロレスしよう」

程よく酔っている彼女が言う。

僕は鼻で笑って、

「小学生か」

彼女を脇を通り過ぎて、店の中に戻る。

閉店の片づけがあるのだ。

酔っ払いで、腐れ縁の幼馴染を構っている暇はない。

「どうせ、32歳だよ」

彼女はふて腐れたように言う。

「32が、プロレスごっこしちゃ悪いのか」

完璧、絡み酒。いつもの事だけ。

僕はため息をつくと、バーテンの黒いエプロンを制服から外して、
「じゃ、かかってくれば」

今日は彼女に向き合って、久しぶりに受けてたった。

「よっしゃっ！」

彼女は嬉しそうに声を上げると、

小学生の頃のように、僕に向かってきた。

僕はかつて、小学1年から5年までは、

彼女とのプロレスごっこに、負けていた。

というか、自分より5歳も年下の少年に、

プロレスなどを挑む事自体が、

今思い返せば、彼女の大人気なさを表している。

でも、そんなプロレスごっこだって、

小学6年になった僕は、高校二年の彼女を負かしていたのだ。

彼女32歳、僕27歳。

どう考えても、今は無謀なプロレスごっこだ。

案の条、彼女はあっけなく僕に負けた。
当たり前だ。

成人している男に、女が腕力で勝てるわけがない。

「はははっ」

彼女は僕に倒されて床に寝そべったまま、大きく笑った。

僕はそんな彼女を見ながら、店の売り物のワイルドターキーを、
これまた店の商売道具の、高級な重いクリスタルのグラスに注ぐと、
ストレートで煽った。

「あんた、いつからバーボンなんて飲むようになったの」

彼女が床から起き上がり、僕を見て言う。

その視線はいじけていた。

「今も毎日牛乳２リットル飲んでたら、そっちの方が気持ち悪いだ
ろ」

僕の言葉に、彼女が俯く。

僕はバーボンの味のする唇をなめて、

そして息を吐くように、彼女に言った。

「泣いたら？本当は泣きたいんだろっが」

彼女はキツと僕を睨む。

「あんたに、そんな事言われたくない」

そう強気で言う彼女の目から、みるみるまに涙が溢れる。

そして、彼女は両手で顔を覆った。

僕は彼女から一瞬目をそらした。

でも今夜は視線を戻す。

今までずっと、僕は我慢をしてきた。

彼女も、ずっと自分をごまかしてきた。

もうそろそろ、いい潮時なんじゃないだろうか。

じゃなきゃこうして僕達は、出会って二十年近くも経っているのに、
今も一緒にはいないのだろう。

僕は意を決すると、

彼女の両手をその顔から外して、抱き寄せる。

そして、彼女の顔に唇を寄せた。

「やだ」

彼女が寸前で、僕を押しつける。

僕は真っ直ぐに、彼女の目を見た。

「私にあんたまで失う事になったら、もう生きていけない」

言いながら、彼女は泣きじゃくる。

「ふざけんな」

僕は強く言う。

「僕とあんたの関係を、あんたの今までの下らない情事と比べるな」
彼女が息を飲む。

なんだ、そんな事も彼女は気がついていなかったのか。

どこまで子供なんだ。32歳が聞いて呆れる。

僕は涙で濡れそぼった彼女の頬と、唇に口付けた。

僕の口付けを呆然と受けている彼女は、やはり大人の女には程遠かった。

「健吾」

大人になってから、初めて僕の名前を彼女が呼んだ。

そんな彼女は、これから起こる僕との事に怯える幼い少女だった。

まるで、小学6年生のようだ。

「大丈夫だよ」

僕が言って彼女の髪を撫でると、
彼女はまたひとしきり泣いた。

そして気が済むと僕の腕にすがる。

照れたように小さく笑って、

自分の涙をこしこしと、その高級そうな洒落たスーツの袖で拭っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3879s/>

affair

2011年4月17日15時06分発行